



『打たれ強く生きる』 城山三郎

人間の真価が試されるのは逆境に立たされたときだろう。有名・無名を問わず、このエッセイ集には奈落の底から這い上がった人びとが数多く登場する。

古代史ブームの火つけ役となった作家の宮崎康平もそのひとりだ。九州の私鉄の常務をつとめていた宮崎は過労がたたって32歳のとき失明。会社は倒産寸前の危機にあり、妻は家出してしまった。ふつうなら打ちひしがれ、途方にくれ、残酷な運命に押しつぶされていただろう。

しかし彼はちがった。不自由な身で会社を再建にみちびき、文筆業に転じてからは『まぼろしの邪馬台国』というベストセラーを世におくりだした。

いったいなが彼を支えたのか。著者は彼の友人で『麦と兵隊』などの小説で名をあげた作家の火野葦平とのエピソードを紹介している。ふたりがバスに乗ろうとしたとき、宮崎は突きとばされ、転倒しそうになったところを火野に助けられた。そのとき火野はこう言ったという。「おれたちは歩こう。いま日本中の者が乗りおくれまい

と先を争ってバスに乗っ取る。無理して乗るほどのこともあるまい。おれたちは歩こう」

火野の言葉を彼は胸に刻み込んだ。それがどれほど励ましになったことか。著者もつづけて言う。「だれもがバスに乗る世なら、むしろ歩いたほうがいい。『おれたちは歩こう』といっしょに歩いてくれる親友があるなら、さらにすばらしい」と。

禅宗の教えによると、人生は「寸前暗黒」だという。長い人生には「成るようにしか成らぬ」ときがある。そうしたときにじたばたしても仕方ない。絶望するのではなく覚悟を決めることが肝心だ。その一方で命がけの飛躍を迫られるときもある。「いま、ここ」という瞬間だ。

「成るようにしか成らぬ」ときと「いま、ここ」というとき。このふたつを見極めることが「打たれ強く生きる」ための秘訣なのかもしれない。(高倉)

○新潮文庫・定価460円(税別)／しろやま・さぶろう
愛知県生まれ(1927年～2007年)。東京商大卒。愛知学芸大の教員を経て経済小説の大家として活躍した。著書に『総会屋錦城』(直木賞)など多数。

<主要施設>



屋上庭園の特徴を解説版で紹介しています。

中高木から地被類まで、多様な植栽の生育状況の調査や昆虫・鳥類の調査もしています。